

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(4年計画の1年度目)

1. 研究課題

(和文) 現代中国文化の深層構造

(英文) Deep structure of the modern and contemporary Chinese cultures

2. 研究代表者

(氏名) 石川禎浩

3. 研究期間

平成 22年 4月 から 平成 26年 3月 まで

4. 研究目的 (400字程度)

現代の中国文化は、芸術にしても思想にしても、その中に歴史の刻印や記憶、そして政治との軋轢を内包している。それらは、例えば文化大革命や民主化運動弾圧のように、公的に巧みに封印されてはいるが、間違いなく文化の深層を形作っている。本研究班は、こうした現代中国の文化の深層構造を、20世紀初頭から今日に到るおよそ100年を対象に、歴史学的手法によって解明しようとするものである。政治との関わりで言えば、現代中国文化は旧来のイデオロギーと如何なる摩擦を抱えているのかなどの課題の解明が目指されるであろう。また、文化活動そのもので言えば、今日の文化の多様化は、清末から民国時期の文化的カオスと類似の状況なのか、そしてそもそも中国という文明体系が近代以降の異文明との接触の中で、それへの接合をはかるということとはどのような文明史的意味を持つのか、これらがすべて俎上に載せられるであろう。

5. 本年度の研究実施状況 (400字程度)

本年度は、共同研究員の公募を行った上で、4月より共同研究班「現代中国文化の深層構造」を発足させ、隔週開催の研究班を中心に活動を進めた。研究班発足にあたっては、班員全員にたいして研究班の進め方を趣意書を配布して説明し、班の運営指針を示した。年度を通じて計14回の例会を開催、研究班員は時期によって若干の変動があったが、ほぼ40名ほどで、毎回の研究班例会の出席者は20-25名であった。研究班での研究報告、討議を意味あるものにし、単なるサロンの放談に終わらせないために、研究報告者には事前に報告原稿(レジュメ)の提出を義務づけ、それを研究会開催に先立って班員に配布する体制をとった。また、それぞれの報告者の研究内容をより深め、討議を実りあるものにするために、毎回の報告にはコメンテーターをつけ、専門分野の近い研究者により多くの提言・アドバイスを求めるよう工夫した。

6. 研究成果の概要（400字程度）

本年度に計14回おこなった班例会各回の報告者・報告題目は、以下の通りである： 4月23日石川禎浩「共同研究班“現代中国文化の深層構造”を始めるにあたって」、5月14日 中村哲夫「孫文と現代新儒学：主として「哲学範疇」において」、5月21日小野寺史郎「王清穆『農隱廬日記』より見た民国江浙紳士の活動について」、6月11日吉田豊子「クルジャ事件をめぐる中ソ交渉（1944年～1945年）」、6月25日丸田孝志「中共冀魯豫区根拠地の象徴と民俗利用」、7月9日瀬戸宏「抗日戦争期の曹禺作品上演」、10月1日菊池一隆「アジア・太平洋戦争期におけるアメリカ華僑の動態と特質」10月15日 山崎岳「広西土司と民族識別」、11月12日三田剛史「近代中国の自己認識への道程」、11月26日「鈴木仁麗 日中外交における東部内モンゴル」、12月10日柴田陽一「留学生・翻訳・引用からみる日中地理学交流」、1月21日坂井田夕起子「戦後中国の仏教外交」、2月18日田辺章秀「民国初期県知事兼理司法制度における「判決」と上訴の問題」、3月4日宮原佳昭「1930年代における「読経」運動と湖南教育界」

7. 共同研究会に関連した公表実績（出版、公開シンポジウム、学会分科会、電子媒体など）

本研究班の研究成果を広く社会に向けて発信すべく、人文研アカデミー・現代中国研究センターと提携して、9月から10月にかけて4週にわたり、連続セミナー「現代中国——そのイメージ」としてセミナー室1で開催した。各回の聴衆は40名ほどで、大変に好評であった。